

五人女の一の筆：「中段に見る曆屋物語」論

木越，治

<https://doi.org/10.15017/4741902>

出版情報：雅俗. 6, pp.63-80, 1999-01-20. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：



五人女の一の筆 ―「中段に見る暦屋物語」論―

木 越 治

『好色五人女』巻三「中段に見る暦屋物語」でもっとも印象深いのは、第二章の末尾、おさんが茂右衛門との「あやまち」の結果を主体的に受け止め、みずからの運命をそこに投じていこうとする姿である。

五月十四日の影待の夜、茂右衛門をこらしめるためりんに入れかわって床に入ったおさんは、しかし、「手毎に棒乳切木手燭の用意して」待ち構えていた「下くの女ども」ともども寝入ってしまう。が、茂右衛門は約束の刻限に合わせておさんの寝ているりんの部屋に忍んで来る。

七つの鐘なりて後、茂右衛門下帯をときかけ、闇がり忍び、夜着の下にこがれて、裸身をさし込、心のせくまゝに、言葉かはしけるまでもなく、よき事をします、袖の移香しほらしやと、又寝道具を引きせ、

さし足して立のき、「さてもこごかしき浮世や、まだ今やなど、りんが男心は有まじきと思ひしに、我さきに、いかなる人か物せし事ぞ」と、おそろしく、重てはいかなく、おもひとまゝるに極めし。

このシーンは一種の艶笑譚として書かれている。「下帯をときかけ」「裸身をさし込」「心のせくまゝに」「よき事をします」という男のあせりぶりの的確な描写、「さてもこごかしき浮世や、まだ今やなど、りんが男心は有まじきと思ひしに、我さきに、いかなる人か物せし事ぞ」と、ここに至ってもまだ騙されたままにいる茂右衛門の姿のおかしさは何にもたえようがない。

やがておさんが目をさます。

其後、おさんはおのづから夢覚て、おどろかれしかば、枕はづれてしどけなく、帯はほどけて手元になく、鼻紙のわけもなき事に、心はづかしく成て、

おそらく、ここを読んだものは、男であれ女であれ、こういうことが実際にあるのかどうか首をかしげるにちがいない。酒席での話題に供したりすれば、さまざまの経験談が入り乱れて、甲論乙駁のにぎやかな議論になることだろう。わが西鶴研究家の方は、いたってまじめに、「こうした交合の場合は希有なことかも知れないけれども、仮眠中の野婦の下腹部に蛇の入った説話もあって、あり得ないことはなからう」(小野晋一九七五)と実証的にせまったり、熟睡させたのは「作者のおさんに対する思いやり」であろう(同)と推測してみたり、さらには、

もちろんおさんは事の間中、終始眠りこけて意識不明だったわけではない。一見そのように読みとれるが、それは、ここでもあくまでおさんの表面の意識に即して書いているからである。床に入って来た茂右衛門にいきなり抱かれた時―「下帯をとしかけ」「裸身をさし込心のせくまゝに言葉かはしけるまでもなく」はその不意打ちぶりを強調する―目を覚しかけたに違いのないのだが、あまり不意だったので、理性による自制力が発動する暇もないうちに抱擁され、茂右衛門とわかつて夢中で遂にそれに応じてしまったのだ。……おさんが半睡状態ながら茂右衛門の抱擁に激しく応じた事実

は、事の終ったあとの茂右衛門の述懐ではつきり示されている。「まだ今やなどりんが男心は有ましきと思ひしに我さきにいかなる人か物せし事そとおそろしく」。立ち去る時「又寝道具を引きせ」つまりふとんを掛けてやったのに、おさんが正気を失ったままにいるというのも、この慌しい情交に、彼女が如何に激しく燃焼し得たかを示す。恐らくは安堵感もあって再び短い眠りに落ちていったのであろう。(佐々木昭夫一九八〇)などと、まるでその様子を見てきたかのように想像をめぐらすものまでいる。

しかし、ここで私は、それらの解釈の当否をあげたおうというのではない。それよりも、この箇所は、読者にさまざまな想像を許すテキストである、ということを言いたいのである。読者は、それぞれの経験や趣味や人生観によって、この箇所を自由に解釈すればよい。ここには、その想像をさまざまげようなことは何も書かれていないからである。

しかし、そのあとのおさんの行為に関してはそうではない。

「よもや此事、人にしれざる事あらじ。此うへは身をすて、命かぎりに名を立、茂右衛門と死手の旅路の道

づれ」と、なをやめがたく、心底申きかければ、茂右衛門おもひの外なるおもはく違ひ、のりかゝつたる馬はあれど、君をおもへば夜毎にかよひ、人のとがめもかへりみず、外なる事に身をやつしけるは、追付生死おつけしやうじの二つ物掛かひ、是ぞあぶなし。

事件は偶然に起ってしまった。その偶然を彼女は必然に転化しようとする。偶然を偶然として一回きりの出来事として終らせてしまうのではなく、必然的な出来事として、あえて、あやまちの側に身を投げて行こうとするのである。

「よもや此事、人にしれざる事あらじ」というのが、本文に唯一明示的に記されている理由であるが、この段階で「人にしれざる」ための方策が全くなかったとは思われない。かりにうわさとして語られるような事態になったとしても、一回きりで終らせる強い意志を持っていたならば、それを時間の経過のなかに流し去ってしまうこともできたはずである。

しかし、彼女は、そういう小細工を一切弄さない。本文にあるごとく、「なをやめがた」いのである。それは、肉体から発せられた欲求である。それに命をかけることを彼女は決意している。それが、有夫の女の密通という、死刑に値する罪であることを知らないわけではない。そのこと

を充分にわきまえたうえでの選択なのである。この作品の主人公（たち）に「好色」の名が冠せられねばならなかったのは、まさにこの一点においてである。

ここでも、作者はなんの説明もしないが、しかし、それは、さきの情交シーンを説明なしで書くこととは明らかに意味が異なる。きわめて饒舌に語りを進めて来ているが、肝腎の一点でつきはなしてしまうという、この作品の語りの特質がもつともよくあらわれているところなのである。

作者は、冒頭部から語りつづけてきた主人公の像が、ここで、ひとつのはっきりしたかたちを結ぶであろうことを確信している。だからこそ、なんの説明もしないのである。この点に関しては、他の四つの巻も全く同様であるといっている。

とすれば、我々は、作者のその意図と手法をさぐるべく、なによりもまず、冒頭部からここに至るまでの主人公の描かれ方を見ておかねばならないだろう。

二

第一章の「姿の関守」は、「元禄ファッションショー」（江本裕一九八五）ともいふべき女性群像のなかに主人公

を配して、彼女の他を庄するほどの美貌を描いたものであるが、その冒頭は次のように始まる。

天和二年の暦、正月一日、吉書万によし。二日、姫は

じめ、神代のむかしより、此事、恋しり鳥のをしへ、
男女のいたづらやむ事なし。爰に大経師の美婦とて、
浮名の立ちつづき、都に情の山をうごかし……

いきなり暦を出してくるのは、いうまでもなく京暦の発売元である大経師の家についた事件を取り上げる章だからであるが、「吉書万によし」と暦の記述を書き写したあと、好色物らしく「姫はじめ」に続け、「男女のいたづらやむ事なし」と軽くからかい気味にあしらいながら、主人公である「大経師の美婦」の紹介に移るという手順はまことにあざやかなものと評してよい。

そうして、彼女の紹介のあと、四条河原での「さはぎ中間」による品定めがはじまり、様々の女性が外見の丁寧な紹介とともにあらわれそして去っていく。その女性群像の最後に、

ゆたかに乗物つらせて、女いまだ十三か四か、髪すき流し、先をすこし折もどし、紅の絹たゝみてむすび、前髪若衆のすなるやうにわけさせ、金髻にて結せ、五分櫛のきよなるさし掛、まづはうつくしき、ひと

つゝいふ迄もなし。白しゆすに墨形の肌着、上は玉むし色のしゆすに、孔雀の切付見へすくやうに、其うへに唐糸の網を掛、さてもたくみし小袖に、十二色のたゝみ帯、素足に紙緒のはき物、うき世笠跡より持たせて、藤の八房つらなりしをかざし、見ぬ人のためといはぬ計の風義

というふうに登場した女性が「今朝から見尽せし美女ども」を圧倒してしまう美人であり、「室町のさる息女、今小町」と呼ばれる存在であることが語られる。彼女が、独身時代の「大経師の美婦」であることは、次の章のはじめの部分に、

今小町といへる娘ゆかしく、見にまかりけるに、過し春、四条に閑居て見とがめし中にも、藤をかざして、
覚束なきさましたる人、是ぞ

とあることで容易に知られるが、しかし、「大経師の美婦」と紹介されたはずの彼女は、いったん独身にもどってしまったのだろうか。ここまで読んできた読者は、いつのまにか時間がさかのぼってしまっていることに当惑するにちがいない。

第一章の時間の転換は、果たしてどこで行なわれているのであろうか？ 佐々木一九八〇は、

ところで、十三四才の娘おさんを出すのなら、なぜ冒頭で天和二年と言い、大経師の美婦ありと言い、そのまま叙述を進めて来たのか。これは延宝五年の或る日のことだという断りを言い忘れたというのか。実際はこの矛盾は詩的でしやれていて、要するに俳諧的だからか、一向に気にならない。時間の食い違い、むしろ廻行が叙述のどの地点で起ったのかという詮索に誘われることもない。

と、こうした時間構成が作品にとってさほど問題にはならないことを述べ、さらに言葉を継いで、

この少女の運命は過去に完成されてしまっているから、これほど確実な事はない。一方、その運命が前途に待つことを少女自身は知らない。そこからその美しさは不吉な悲哀感を色濃く帯び、痛ましさが読む者の胸を打つ。仮にこの夕べが延宝六年のことだなどとはつきり規定されていたら、この効果ははるかに希薄だったであろう。また、登場したのが天和二年情事に走る直前のおさんだったとしてもこうはいかなかったに違いない。

というふうにその効果を説明している。丁寧な説明であるが、なお納得いくものとはいえない。江本一九八五には各

巻の時間構成に関する解説があり、巻三については、

この話を西鶴は、天和二年正月から翌三年九月までの一年九ヵ月と設定した。ところが第二章で、おさんは大経師に乞われて嫁入りし、夫婦の語らひ深く、三年が程を重ねる。かつその後この章の時節は、秋↓神無月↓五月十四日と推移するから、計四年が含みこまれることになる。みづからが設けた大枠（一年九ヵ月）と違う部分を以前は作者の筆のすべりと考えていたが、今は巻二同様西鶴のたくみと考えている（傍点原文）。とある。そして、その「たくみ」について、

本話首章で、おさんは「十三か四か」で登場、以後作者は彼女の年齢にまったく触れない。……第二章がもっとも時間的ふくらみを持つこと明瞭で、第二章と三章の間の時間的隔たりの大きいことも明らかである。この第二章で二人は結婚し、おさんは町家の理想的妻女として働き、つまりは二人の一定期間生活が営まれたのだった。かりに第一章で十四歳だったとすればここで十八歳。とするとつぎの第三章は十九歳の春となり、「都の富士、二十にもたらずして、頓で消ゆべき雪」にスムーズにつながっていく。筆者は西鶴の年齢計算の厳密性を言っているのではない。読者熟知のモデル

の年齢にふさわしいたくみが、ここでも巻二同様施されていることを知っていたければ、事は足りるのである。

と説明している。これによると、「読者熟知のモデルの年齢にふさわし」く書いたことが作者の「たくみ」（「作者の意図」と同義であろう）であるらしい。しかし、そういうことを「たくみ」というだろうか？ 「読者熟知のモデルの年齢」に合わせるということは、執筆にあたったの基本的な条件にすぎない。それを実現するための方法は様々考えられるはずであるが、なぜこういう変則的な構成でなければならなかったのかを考えることこそが作者の「たくみ」を論ずることになるはずであると思われるのだが……。

ここで、まずなにをおいても問われねばならないのは、作品の冒頭に出る「天和二年」という年が、この作品においてどういう意味をもつ年であるか、ということである。

佐々木一九八〇には「天和二年情事に走る直前のおさん」という言い方がみられ、江本一九八五も「天和二年正月から翌三年九月までの一年九ヵ月」の間に二章後半の事件及び三章以下の出来事があったと考えているので、いずれも、おさんの密通事件―それは五月十四日の夜に行なわれた―

のあった年と考えることがわかる。この説に従って、各章に書かれていることがらを年表風にまとめると次のようになろう。

延宝六年 14歳 この春「姿の関守」あり。その後お

さんは大経師に嫁ぐ（第一章・第二章冒頭部）。

延宝七年

延宝八年

延宝九年（天和元年） 晩秋、りんの恋のはじまり。

（第二章）

天和二年 この年の正月が作品の冒頭（第一章）。

五月、影待の夜にあやまち。事件の始まり

（第二章）。

天和三年 19歳 春、石山寺開帳に二人で出かけ、心

中を偽装し逃亡（第三章）。丹波越（第四章）。

茂右衛門の京のぼり（第五章）。9月22日処

刑（第五章）。

「姿の関守」のとき、主人公は「十三か四か」とあるので、ここをもう一年さかのぼらせてもいいが、まずは、こんなところであろう。

しかし、この考え方に立てば、天和二年正月という時点では、事件はまだなにも起っていないことになる。が、そ

ういう段階で作品をはじめていながら、

爰に大経師の美婦とて、浮名の立ちつづき、都に情の山をうごかし

と書くことは、作品の論理としてはたして成立するものだろうか？ さらにまた、

二日、姫はじめ、神代のむかしより、此事、恋しり鳥のをしへ、男女のいたづらやむ事なし。

という書き方も、事件が人々のうわさにのぼっていることを前提にして書いているのでなければ、ほとんど意味をなさないと思われるのだが……。

モデル小説であること、しかも、事件は作品の刊行された時期とかなり近い時期に起っているから読者はその経過を熟知していた、というようなことは、完結した一個の作品としてこの作品を読もうとするときには、たいした問題にはならない。

私は、天和二年という年号を、大経師事件が人々の間で話題になっていた（＝二人が心中したとか逃亡中であるとかのうわさが広まっていた）時期を意味するものと考え、そうであつてはじめて、冒頭部の「大経師の美婦」の紹介が意味を持ち、それと独身時代のおさん像が重ねあわせようという第一章の構成が生きてくるからである。だから、

この立場に立てば、影待の夜も石山寺開帳も丹波越えもすべて天和二年以前のことでなければならぬ。私案によれば、先の年表は、次のように修正されるべきである。

延宝四年 14歳 この春「姿の関守」あり。その後おさんは大経師に嫁ぐ。

延宝五年

延宝六年

延宝七年

晩秋、りんの恋のはじまり。

延宝八年

五月の影待の夜のあやまち。事件の

始まり。

延宝九年（天和元年）19歳 春、石山寺開帳に二人で

出かけ、心中を偽装し逃亡。都中のうわさになる。丹波越。

天和二年

この年の正月が作品の冒頭。茂右衛

門の京のぼりはこの年か。

天和三年

9月22日処刑。

とりあえず、この表にしたがつて、以下、時間構成の問題を考えていきたいと思う。

三

大経師事件が人々の間でうわさになっていた天和二年か

ら第一章がはじまり、「大経師の美婦」と紹介された主人公が、「浮名の立ちつづき、都に情の山をうごかし」云々と説明された、その末尾に「すみ所は室町通」と記しているのが、おそらくこの章の時間構成のポイントとなる箇所である。

本文に従えば、「大経師」の住所は「室町通」であると解すべきなのだろうが、この「室町通」は、末尾における「室町のさる息女、今小町」と意識的に混同させているとみるべきである。つまり、「大経師の美婦」の紹介文は、天和二年における主人公の紹介であると同時に、独身時代の主人公でもあるような、そんな性格の文章になっているのである。「人のこゝろもうきたつ春ふかくなりて」以後、そのまま四条川原での品定めにつながっていき、時間構成上も文章上も問題とすべき箇所が見当たらない以上、時間的なねじれの転換点はこのあたりに求めるしかないと思われる。

もうすこしくわしく「大経師の美婦」以下の文章を検討してみよう。

爰に大経師の美婦とて、浮名の立ちつづき、都に情の山をうごかし、祇園会の月鉾かつらの眉をあらそひ、姿は清水の初桜、いまだ咲かゝる風情、口びるのうる

はしきは高尾の木末、色の盛と詠めし。すみ所は室町通、仕出し衣装の物好み。当世女の只中、ひろい広京にも又有べからず。

おそらく、ここで、「祇園会の月鉾」「清水の初桜」「高尾の木末」といふように京都における四季の景物を主人公の形容に用いることを通して、作者は独自の時間処理をほどこそうとしているのである。すなわち、「天和二年」正月から、「大経師の美婦」の紹介をはさんで、「人のこゝろもうきたつ春ふかくなりて」とつなげていくことで、一見、季節の自然な進行に基づいて記述が進んでいるように見せかけながら、実は、おさんに関する記述の中で、夏・春・秋というふうに季節の景物をランダムに並べることによって、時間の直線的な進行を遮断しているのである。その結果、「当世女の只中、ひろい広京にも又有べからず」は、章末の「今朝から見尽せし美女ども、是にけをされて」という記述に重なっていき、この段階で、「大経師の美婦」と「室町のさる息女、今小町」とはほとんど等質化されるのである。そして、「いたづらものとは後に思ひあはせ侍る」という末尾の語りで、いったん冒頭部へとひきもどされながら、章末の時間は、そのまま次章に引き継がれていくことになるのである。

四

前章末尾で「室町のさる息女、今小町」と紹介されたおさんを、「お内義のな」い「大経師の何がし」が見染め、嫁として迎えるところから第二章ははじまる。

ここで興味深いのは、この章にいたってはじめて主人公「おさん」の名が記されることである。しかも、それが、

吉日をゑらびて、おさんをむかへける。

という箇所、すなわち、大経師に嫁いだまさにその瞬間からであるというのは重要である。それ以前の彼女は、「大経師の美婦」「室町のさる息女、今小町」（第一章）であり、「今小町」といへる娘」「過し春、四条に閑居て見とがめし中にも、藤をかざして、覚束なきさましたる人」（第二章）と書かれるだけで、いまだ名前の与えられていない存在なのであった。もちろん、モデル小説というこの作品の性格からして、おさんという名をあらかじめ知っていた読者も多いはずであるが、作者は、大経師に嫁いだそのときにはじめて、おさんという名を記すのである。結婚してはじめて、彼女は主人公たるにふさわしい人格と相貌を備えた、ということなのであろうか。別の言い方をすれば、第一章で「爰に大経師の美婦……」と紹介された主人公は、まだ、

真の意味での主人公ではなかった、ということなのであろうか。たしかに、前節で、私は、かなりしつこく、その紹介のしかたと時間構成の問題について言及したが、娘時代と結婚後の姿を意識的に混同するような書き方は、彼女が本当の意味での主人公として提示されたのではないから可能であった、という見方もできそうである。しかし、ここで提示されるおさん像は、第一章におけるそれとは対照的である。

夫婦のかたらひふかく、三とせが程もかさねけるに、明暮世をわたる女の業を大事に、手づからべんがら糸に気をつくし、すへんの女に手紬^{てしぎ}を織^{をち}せて、わが男の見よげに、始末を本とし、寵も大きくせせず、小遣帳を筆まめにあらため、町人の家に有たきは、かやうの女ぞかし。

とすれば、「町人の家に有たきは、かやうの女ぞかし」と評されるおさんと「藤をかざして、覚束なきさましたる」「今小町」といへる娘」との間に横たわる懸隔こそが主人公おさんの本質であるとみななければならないことになる。そして、事件は、両者の要素がからみあうかたちで形成されていくわけであるが、注意すべきは、その進行のプロセスにおいて、おさんが、つねに「おさん様」あるいは「奥様」

と呼ばれていることである。^{注3}

○是より肌をさすりそめて、いつとなく、いとしやとばかり思ひ込、人しれずこゝちなやみけるを、後は沙汰しておさん様の御耳にいれど、なをやめがたくなりぬ。○是非なく日数ふる時雨も偽のはじめごろ、おさん様江戸へつかはされける御状の次手に、りんがちは文書でとらせんと、ざら／＼と筆をあゆませ、

○茂右衛門もながな事は、おさん様の手ともしらず、りんをやさしきと計に、おもしろおかしきかへり事をし、又渡しける。

○是をよみかねて、御きげんよろしき折ふし、奥さまに見せ奉れば、

○かならず其折を得て、あひみる約束いひ越ければ、おさん様、いづれも女房まじりに、声のある程は笑て、○とても事の、其夜の慰にも成ぬべしと、おさんさま、りに成かはらせられ、身を木綿なるひとへ物にやつし、

○下／＼の女ども、おさん様の御声たてさせらるゝ時、皆／＼かけつくるけいやくにして、手毎に棒乳切木手燭の用意して、所／＼にありしが、

いづれも、「りん」と茂右衛門の恋愛が進行していく様を

描くところであり、そこに理想的な「町人の家」の「女」と紹介された大経師の主婦おさんがかわつていくわけで、その限りでは、「おさん様」と呼ばれることになんの不思議もない。しかし、本来からいえば、この種の使用人同士の恋愛は禁じられるべきはずのものであり、ましていわんや、その恋文を代筆するなどは、一家の主婦としてあるまじき行為であらう。しかし、おさんはなんの罪悪感もなく彼等の恋愛に口をだし、かわわりを持つ。それは、

夫婦のかたらひふかく、三とせが程もかさねける。

と記されたところに端的に示されている自らの夫婦関係に対する自信を背景にしたものであり、そこから生まれる無防備さのゆえである。と同時に、主人の不在による開放感や、おさん自身が生来備えている派手さ―それは第一章で丁寧に描かれていたものであった―にもよるのであらう。さらにまた、長期間の不在による空聞という要素も見逃すべきではあるまい。そうした諸要素が重なりあうかたちで、りと茂右衛門との恋愛ゲームにおさん以下の奥向きの女たちは一緒になって打ち興じているのである。りんの恋愛を黙認するだけではなく、恋文の代筆、さらには、影待の夜のりんと入れ替わりという、はたからみればはなはだあぶなっかしい恋愛ゲームに打ち興ずるおさん自身は、理

想的な主婦という自己規定から離れてはいないという自覚を持つてはいるはずだが、意識されざる部分ですでに第一章のあの「今朝から見尽せし美女ども、是にけをされて」と書かれる派手さのなかに立ち帰っているとみてよい。しかし、事件がおこらないかぎり、彼女はあくまでも大経師の主婦「おさん様」でいられたのである。しかし、事件は起ってしまった。そして、茂右衛門と、それとは知らぬまに關係を結んでしまったとたんに、

其後、おさんはおのづから夢見て、おどろかれしかば、とあるごとく、たちまち彼女から「様」ははぎとられてしまう。そして、「様」をはぎとられたそのときはじめて、おさんは真のおさんに生まれ変わるのである。

それは、しかし、第一章の若き日の姿も、また、「おさん様」として理想的な主婦であり続けた数年間の彼女が本来のおさんでなかった、ということの意味しない。そこでも、彼女は充分に個性的かつ魅力的な一人の女性である。が、「おさん様」であることをやめ、「おさん」となったその瞬間——自らはその意識をもたぬまま茂右衛門との肉体的な關係を経験したその瞬間——、彼女は、別のなにものかに生まれ変わったのである。だからこそ、「此うへは身をすて、命かぎりに名を立、茂右衛門と死手の旅路の道づれ」

と即座に決心することができたのである。そのおさんの変貌を感得することなくして、この作品の真の理解はありえないと、私は考える。

念のために言い添えておくが、おさんと茂右衛門の關係を「恋愛」などというきれいごとの呼び方ですまずべきではないと私は思う。あやまって結んだ性關係からはじまる二人の關係に、精神的なものは皆無だからである。まだしも、茂右衛門の「肌をさすりそめて、いつとなく、いとしやとばかり思ひ込」んだりんの恋の方がよほど精神的である。第二章の進行の仕方からいえば、りんの恋がおさんの恋に感染していくプロセスと一応はいえようが、おさんのそれは実は「恋」などというなまやさしい呼び方をすべきものではない。むしろ、彼女を襲ったある肉体的事件、とでもいう方が適切ではないかと思われる。だから、私は、それ以前におさんが茂右衛門のことを憎からず思っていたのではないか、という類の詮索をすべて無用のものと判断する。彼女は、ただ自分の肉体を襲った事件に忠実に行動しているだけなのである。

五

いま私は、影待の夜以後、おさんは真のおさんに生まれ

変わった、という言い方をしたが、しかし、彼女の姿が本當の意味で確立するのはもうすこしあとのことである。彼女はまだ、何度も自分の選択に苦しみおびえなければならぬからである。

第三章の石山寺参詣から琵琶湖めぐりにかけてはそのようなものとして描かれている。

花は命にたとへて、いつ散べきもさだめがたし。此浦山を又見る事のしれざれば、けふのおもひ出に……短は我くがたのしび……あらはるゝまで……のがれがたく……舟よばひも、若やは京よりの追手かと、心玉もしづみて……頓て消べき雪ならばと、幾度袖をぬらし……我もなるべき身の果ぞと、一しほに悲しく……いと身の上へはかなし

「此うへは身をすて、命かぎりに名を立、茂右衛門と死手の旅路の道づれ」と覚悟して、事件の側に身を投じたときとはうってかわった態度である。自らの決断を後悔するわけではないものの、それがすぐに終わりをつづげるであらうことを予感し、その予感に脅えている姿である。

竜灯のあがる時、白髭の宮所につきて、神いのるにぞ、いと身の上へはかなし。

と、身の上のはかなさを思つて心から神に祈っている彼女

の姿を我々は忘れないでおくことにしよう。

しかし、そういう殊勝さをみせた直後、茂右衛門の「二人どへへの晝置残し、入水せしといはせて、此所を立のき、いかなる国里にも行て、年月を送らん」という提案に即座に答えて「我も宿を出しより其心掛ありと、金子五百両、挿箱に入来りし」と用意のいいところを見せるおさんはたちまちのうちに、あのたくましい、肉体の欲求に忠実なおさんにもどっている。

そして、周到な準備のもとに、偽装入水心中は決行される。その書き置きに、

我く悪心おこりて、よしなきかたらひ、是天命のがれず、身の置所もなく、今月今日うき世の別

と書かれていることは重要である。二人は、その行為を「悪心」と称し、「よしなきかたらひ」にして「天命のがれ」ざるものであると都の人々―直接には、夫である大経師であり、おさんの実家（＝茂右衛門の主人）であらう―に書き置いているのである。偽装心中に際しての書き置きだからいいかげんなことを書いてあるわけではあるまい。彼等は、これが道にはずれた行ないであることをはっきりと自覚している。そのうえで偽装なのである。

彼等は確信犯として描かれているわけであるが、作品の

語りも、

○いたづらものとは後に思ひあはせ侍る（第一章）

○生死の二つ物掛、是ぞあぶなし（第二章）

○いとゞ身のうへはかなし（第三章）

○是非もなきいたづらの身や（第三章）

というふうには、そうになった事情を遠巻きにながめ、気の毒がったりすることはあるが、その罪を支持するようなことは決してない、というレベルに保たれている。こういう語りのレベルと本文の内容をこつちやにしたまま、この作品が「悲劇」であるとか「喜劇」でないとかという議論をしてみても全く無意味であると私には思われる。

そうして、彼等はとりあえず、逃げおこせる。

京都にかへり、此事を語れば、人々世間をおもひやりて、外へしらさぬ内談すれども、耳せはしき世の中、此沙汰つりて、春慰になくさみいひやむ事なくて、是非もなきいたづらの身や。

と第三章の末尾には書かれるが、ここに至ってはじめておさん・茂右衛門の所行が一般の人々の間で話題になっていくわけである。「是非もなきいたづらの身や」という末尾の語りが受けているのは、第一章末尾の「いたづらものとは後に思ひあはせける」であり、これを介して、冒頭に

「大経師の美婦とて、浮名の立ちつづき、都に情の山をうごかし」と紹介されたおさん像につながっていくのである。しかし、人々が思い描いているおさんとは別のところで、彼等は彼等自身の道を歩んでいく。四章以下がそれである。

六

第四章は、この作品のうちでもっとも読者サービスに徹した章といえる。その意味では、趣向が先行し、やや内容に乏しい章といえるが、この章で注目すべきは、丹波越えて体を酷使したため「命のおはるを待居る」という状態になったとき、「今すこし先へ行ば、しるべある里ちかし。

さもあらば、此浮うきをわすれて、おもひのまゝに枕さだめて語らん物を」という茂右衛門の言葉に「うれしや、命にかへての男じやもの」と「氣を取なをし」たおさんを、

たましい魂にれんぼ入かはり

と評しているところである。性愛への執心が彼女に生きる力を与えているわけで、彼女の魂は「恋慕」だけで占められるようになった、という書き方である。別の言い方をすれば、茂右衛門との性愛がいまの彼女にとってのすべてであることを彼女自身が悟ったということである。そのことは、切戸の文殊堂で見た「霊夢」への対応にもっともよく

あらわれている。

汝等世になきいたづらして、何国^{いづく}までか、其難^{がた}のがれがたし。されどもかへらぬむかしなり。向^{きやうかう}後浮世の姿をやめて、惜きとおもふ黒髪を切、出家となり、二人別^くに住て、悪心さつて菩提の道に入ば、人も命をたすくべし

という神のお告げは、一般的な倫理のあり所を語るものであろうが、しかし、彼女は、神仏にすがったからといって、なにかわるわけでもないことをよく知っている。

すへどは何にならふとも、かまはしやるな。こちや是がすきにて、身に替ての脇心。文殊様は衆道ばかりの御合点、女道^{にようどう}は曾てしろしめさるまじ

という小気味のよいタンカは、「恋慕」に命を懸けることをあらためて決意した彼女にしてはじめて口にできたものであった。彼女が三章の「白髭の宮所」で「身のうへ」の「はかな」さ进行を思いつつ「神」に「いの」ったことを思い出してほしい。その地点から、いまや、彼女は、神に対して、自身の決意を語って一步も引かず、逆に「文殊様は衆道ばかりの御合点、女道は曾てしろしめさるまじ」と言い返すところまで到達したのである。ここに至ってはじめて、作者にとってのおさん像は確立したとみることができ

る。章の末尾が、

橋立の松の風ふけば、塵の世じや物と、なをくやむ事^{こと}のなかりし。

となつていて、前章までのような、彼女のなりゆきを危惧するような語り（「是ぞあぶなし」「是非もなきいたづらの身や」等）ではなく、性愛を主体的に選り取ったおさんの姿をそのまま描くだけで終つてることがそれをなによりも端的に示している。もはや、彼女は、死をこわがってはいない。生きていられる限り生きていく、という覚悟のなかにおり、そうである以上、作者としても、これ以上費やすべきは言葉はないのである。以後、おさんが、末尾の見事な死に様を除いて、この作品から姿を消してしまうのは、このためである。

七

第五章は、茂右衛門のために用意された章である。

これまで、茂右衛門はつねにおさんの後塵を拝する存在であった。わずかに三章で偽装心中を彼から先に提案したところに、ある種の主体性は認められるが、それも、即座に用意してきた五〇〇両を差し出すおさんの姿の前には全く印象の薄いものであった。しかし、おさんのありようを、

第四章まででほぼ描き尽くしたとき、はじめてこの作品のなかに、茂右衛門に言及する余地が生まれたのである。

「あしき事は身に覚え」以下にはじまるマクラの部分は、おさんの夫の立場について述べたものであるが、それをうけて茂右衛門の「無用の京のぼり」が描かれるのも、充分に計算されたものといえよう。

とはいえ、その「京のぼり」は、いかに「ゆかしくおもひやる」場所であっても、もはや彼のいるべき場所ではないことを確認するだけに過ぎなかった。そういうなかで、もっとも印象的なのは、四条河原で芝居を観るシーンであろう。

四条川原にさがり、「藤田狂言づくし、三番つゞきはじまり」といひけるに、「何事やらん、見てかへりて、おさんに咄しにも」と、円座あんざかりて、遠目をつかひ、もしも我をしる人もと、心元なくみしに、と芝居をみはじめた茂右衛門であるが、

狂言も人の娘をぬすむ所、是さへきみあしく、ならび先のかた見れば、おさん様の旦那殿。たましゐ消て、ぢごくのうへの一足飛、玉なる汗をかきて、木戸口にかけ出、丹後なる里にかへり、其後は京こはかりき。と逃げかえってしまふ。「おさんに咄しにも」と茂右衛門

が考えた直後に「おさん様の旦那殿」を見た、とあえておさんに「様」を付して対比的に記すことによって、自らの奪った女性が他ならぬ大経師の主婦であったことを痛切に思い出させられる茂右衛門の心理が活写されている箇所である。二章でも、「おさん」と「おさん様」という二つの呼称が巧みに使い分けられていることに注意をうながしたが、それは五章のここでも同様なのである。

八

さきに私は、この巻の各章の時間を年表風にまとめたが、それに従えば、「天和二年の暦、正月一日」と書き出されたこの作品は、第五章を除いてすべて天和二年以前の出来事が書かれていたのであった。すなわち、第一章で、「爰に大経師の美婦」と紹介された天和二年正月以降のおさんは、処刑の場面を除いて、以後の巻に登場することはないのである。そうして、作品は、「浮名の立ちつづき、都に情の山をうごかし」と浮薄な世相を反映するかのようになんかに理解されていた主人公おさんの真の姿を、時間をさかのぼって描き出していったのである。その描写の根底にあるのは、「好色」とよぶところのものが、人間の属性ではなく、自らの「性」を自らがコントロールできなくなった状

態であるという認識である。そして、その状態は、ある瞬間に、あるきっかけで、突然に訪れるものだ、というのが『好色五人女』という作品の基本にある人間認識である。

第一巻のお夏の場合、それは、清十郎のくけ帯に縫い込まれた遊女たちからの恋文を発見したときに訪れた。第二巻のおせんが、恋こがれた樽屋と幸福な結婚生活を送っているながら、麴屋の妻の一言でたちまちのうちに姦通を犯してしまったのもこの「性」という魔物のせいである。お七やおまんの場合は、男色という要素がからんでくるので、それほど単純ではないが、彼女らも「好色」の欲求にたいしてはきわめて忠実である。二ノ三にある「されば一切の女」以下の長口舌は、たぶん主人公を含む女性達への説教ではない。「性」というものが、意志や理性ではどうにもならないものであることを語っているだけにすぎないのである。

我々は、この大経師事件をとりあげた「大経師おさん歌祭文」の末尾に

京でおさんと好色の。五人女の一の筆。世の口ずさみ一昔。

とあることを知っている。周知のように、野間光辰一九五二により、『好色五人女』に先行する「五人女もの」の存在を示すのではないか、とされた一節であるが、『好色五人女』よりこの歌祭文が先行したという確証が得られないため、今日では否定的な意見が多いようである。

とすれば、これらの歌祭文は、『好色五人女』の影響下にできたものとみていいことになるが（もちろん近松以下の同じ事件を取り上げた浄瑠璃・浮世草子等も影響しているが）、ではなぜ、第三番目に位置するこの話を「五人女の一の筆」と語らねばならなかったのだろうか。

私は、この「五人女の一の筆」という言い回しを、この巻が、『好色五人女』の構成上の典型となる巻であることを意味する、と読んでみたい気がする。

巻三の五つの章は、

- (1) 主人公の登場
- (2) 密通
- (3) 駆け落ち
- (4) 道行
- (5) 処刑

というふういきわめて整然とした構成になっている。こうした整然とした構成を規範とすることによって、他の四篇

の構成上のおもしろさがみえてくるはずだ、と思われるからである。それがいちばんよくわかるのが巻二で、この巻を巻三の構成に即してみれば、一〜四章までが(1)にあたり、(2)(3)(4)(5)が五章にいつべんに詰め込まれていることになる。そのくずし方のおもしろさは巻三と対比することではじめて見えてくるのではないだろうか。同様のことは他の三巻についても多かれ少なかれあるはずで、そういう基準となるという意味で、私は、この巻を「五人女の一の筆」と称した歌祭文の言い回しを、現在に再生させたいと思うのである。単に成立論の一素材として忘れ去ってしまうには、あまりにももったいない言い回しであると思うがゆえに、末尾にあえて書き付けておく次第である。

注

- 1 わずかに、金子武雄一九五四のみが「爰に大経師の美婦とて」の箇所について

「大経師の美しいおかみさんといふのがあったが、此の女の娘時代には」という位の意で下文へ続くものと思はれる。

という注を施しているのが注目される。ただ、この解

- 2 二章以下を読んでみても、大経師の住所に関する情報は何も得られない。ただし、この事件に関する諸氏の研究へたとえば、諏訪春雄氏『近松世話浄瑠璃の研究』昭和49年などによれば、大経師の住所は「烏丸通四条下ル」ないし「烏丸通綾小路ノ南」である。

- 3 唯一、

「万にかしこき人もがな、跡を預て表むきをさばかせ、内証はおさんが心だすけにも成べし」と、何国もあれ、親の慈悲心より思ひつけて

という箇所だけが例外であるが、これは実家の親の言葉のなかに出るものであるから呼び捨てにされていて不思議ではない。

引用文献一覧

野間光辰 『西鶴年譜考証』 昭和二十七年（一九五二）
中央公論社刊

金子武雄 『好色五人女評釈』 昭和二十九年（一九五四）
有信堂刊

小野 晋 「中段に見る暦屋物語」について 国語国文

論集 5 昭和五十年（一九七五）二月

佐々木昭夫 「好色五人女」解（上・中・下） 日本文

化研究所研究報告 15・16・19 昭和五十四年（一九

七九）三月、昭和五十五年（一九八〇）三月、昭和五

十八年（一九八三）三月（引用は主の中から）

江本 裕 『好色五人女』 昭和六十年（一九八五）

講談社学術文庫刊

なお、『好色五人女』の本文は、『定本西鶴全集』第二巻
によったが、振り仮名は適宜省略し、句読点・濁点を補っ
た。